

人間ドック健診施設機能評価 Ver.4 総合評価

施設名： 三河安城クリニック

受審施設の概要

三河安城クリニックは、1994年にサンクリニックとして開院し、1995年より人間ドックを開始した。2000年に現在のクリニック名に変更され、2008年に隣接する現施設に移転された。旧施設は健康づくり支援センターとして現在運営されている。同ビル内には検査センターが併設され、他の医療機関の検査受託も行われている。

本機能評価は平成21年に初回認定を受け、今回が2回目の更新審査である。年間の受診者数は、学会の定める検査項目を満たす人間ドックは約640名、その他人間ドック（学会の基本検査項目から一部不足あり）を含めると、約9,500名の人間ドック受診者を受け入れている。人間ドック以外のその他健診受診者は、約13,000人、巡回検診は約22,000人である。

第1領域 理念達成に向けた組織運営

理念と基本方針は定められているが、ホームページ上では、策定日、変更時期などが明記されていないため整備されたい。個人情報保護については、平成23年にプライバシーマークを取得し、院内掲示もされている。ホームページについては、各種検査コース表、担当医師、その他職員体制等、全般的に更新が十分になされておらず、実態に即した改修が望まれる。

各種委員会規定は定められているが、今後は記録管理のさらなる徹底をお願いしたい。

理念・基本方針・個人情報の取扱い・就業規則・倫理規定・受診者の権利・責務や産業廃棄物処理方法等は、各自のPC（健診システム内）に掲載され、いつでも閲覧できる体制である。また、有給消化や残業時間等の管理も月毎にまとめられ対応がなされている。ただし、職員の意見や要望を把握するしくみや、相談窓口は不明確であり、今後整備を検討されたい。

中期経営計画・年度事業計画は、数値的な目標の設定はされていないが、業務目標事項として作成されている。これらは、安全衛生委員会にて年度末に実績等の報告がなされている。

職員体制については、医師は人間ドック認定医が3名、人間ドック健診専門医が2名在籍している。受付を含め、健診センター内業務は保健師や管理栄養士が従事し、事務職は予約・結果表発送などの業務に携わっている。

教育体制として、年度計画としては定められていないが、健診関連の研修については、その都度上司の許可を得て参加可能となっている。また入職時研修として、個人情報保護や感染症等の研修はなされているが、今後は接遇研修も取り入れるなど、さらなる教育体制の構築が望まれる。

医療安全管理体制については、委員会が設置され、マニュアルも整備されている。インシデントは、院長への報告後リアルタイムで検討・対応がなされている。情報管理体制は適切で、個人情報保護マネジメントシステム（PMS）に準拠した体制が構築されている。

施設内はバリアフリーで、車椅子や専用エレベーターも整備され、現場スタッフが健診当日に介助に携わり、高齢者や障害者等の配慮が必要な受診者への対応がなされている。

外国人受診者については、日本語で対応可能な場合は受診可能としている。

第2領域 受診者中心の良質な健診の実践

予約・受付の業務は、マニュアルに沿って実施されている。人間ドックの検査項目については、個別の契約によっては胸部X線検査が1方向であるなど学会の定める基本検査項目に一部満たないコースもあるが、概ね適切に実施されている。なお、内視鏡検査は未実施である。

身体計測、視力検査、肺機能検査は一つの検査室で実施されているが、待合室からは見えないようパーテーションで仕切りがなされプライバシーには配慮されている。なお、来年春には、人間ドックの新棟がリニューアル予定であり、今年秋より工事が開始される。これに伴い、さらなる快適な環境へと改善されることが期待される。

受診者が安心・安全に検査を受けられるよう事前の送付書類やホームページによる情報提供がなされている。ホームページ内には、「人間ドック・健診コース料金表」というページはあるものの、掲載はコース名と価格のみで、各コースどのような検査が行われているかは不明瞭であるため整備をお願いしたい。

精度管理については、検体検査は同ビル内の検査センターとの連携により、短時間で結果確認ができる体制である。精度管理サーベイの結果は、毎年クリニックに報告されている。生理・画像などの各種検査の精度管理についても、検査ごとに責任者が決められ、業務マニュアルにもとづいた管理を行っている。胸部X線画像検査精度管理サーベイは良好な成績であった。一方、腹部超音波検査のサーベイへは参加されいないため今後検討されたい。

検査結果の判定は人間ドック学会の判定区分に準拠して行われている。画像の判定は、原則、外部遠隔読影（1次読影）の後、院内のドック健診専門医による読影のダブルチェック体制である。MRI、マンモグラフィー検査は1次、2次ともに院外遠隔読影体制である。

医師による結果説明は、診察と保健指導も兼ねて行われる。今後は、画像も含めた結果説明が行えるよう、健診の流れなど検討が望まれる。また保健指導についてさらなる充実を望むとともに、今後は専門職の関与も積極的に検討されたい。

第3領域 継続的な質改善の取り組み

受診者の要望を把握する体制として、検査終了時にコンシェルジュが受診者に口頭で感想を求めている。ご意見箱の設置はなく、受診者の意見・要望を積極的に収集する体制とは言い難く、今後はご意見箱の設置やアンケート実施等も活用されるとよりよい。

健診結果のフォローアップ体制については、マニュアルが整備され対応されている。要精検率は乳腺超音波検査を除けばおおむね10%未満であり適切な範囲と判断する。精検受診率は60%程度であるため、今後さらなる精検受診率向上のために工夫が望まれる。

健診結果の分析は年度末に行われている。2018年度の日本人間ドック学会学術大会に演題発表されており、今後も継続的な取り組みを期待したい。

健康経営にむけた取り組みとしては、健診データを事業所毎にまとめた評価書

を作成するしくみがあり、希望する事業所に提供している。産業医や保健師が事業所を訪問する等、産業保健活動も活発である。受診者データの分析や受診者に向けた情報提供は積極的にはなされていない。業務改善の体制としては、業務改善委員会があり、毎年目標を定めて業務改善に取り組んでいる。定期的な評価が行われ記録も適切である。

総括

人間ドック施設として、クリニック外観から内装、調度品まで、受診者がゆったりと快適に過ごせる環境の整備、また、院内カメラを用いて、受診者がスムーズに受診できる工夫など、日頃からサービスの充実に向け検討を重ねられている点は評価できる。ホームページで公開される情報については適宜更新することを望む。

総合的見地から、人間ドック健診施設機能評価の認定（更新）に値すると判断する。

審査日 2019年3月14日

認定承認日 2019年3月23日